

わが家には居候がいる。この文は居候に秘密に書いているので是非黙っていて頂きたい。告げ口と思われるのがいやだから。私も年金生活なので、部屋代をもらって生活の足しにしたいと思ったのだが、彼は、それとなく催促しても全く取り合わない。知らんぷりだ。どうやら金を持っていないのは本当だということがわかったので、さすがに可哀そうだと思って食事を出している始末だ。ただ、食事を出しても、こちらが出すのは当たり前だみたいな顔をして物も言わずに食べている。それどころか、食事の時間になると、台所の前に来て催促がましく物も言わずにつっ立っている。出せばいただきますも、ありがとうも言わずに、あっという間に平らげてしまう。もちろん、ご馳走さまのこの字も言わない。

さすが笠原さん、意外にやさしいんだとか、そりゃお人よしすぎるよ、お前に替って追い出してやろうとか、そんな声が聞こえるが——ちょっと待って下され、まあ白状しよう。そいつの名前は初めはコタだったが、改名してクロベとなり、また変わって今の名前は優雅と言う。またまた嘘くさくて申し訳ない。ここらで本当のことを話そう。

実は実は、我が家の犬の話である。犬が三代に亘り我が家にやって来て、よく言えばのびのび、実はやりたい放題？だと言う話である。それではこの三代を順に紹介しよう。

(初代) コタ 正式名 小太郎



ウチに来た頃のコタ

私の弟から紹介された犬で、チャウチャウがまじっていると言う雑種である。雄犬で、昭和59年12月にウチに来た時はころころむくむくした口先の黒い茶色の子犬だった。小さい悪漢みたいな顔でいたずらばかりしていた。箆笥をかじったり、障子をガジガジかじってぼろぼろにしたり、畳を爪でひっかいてばさばさにしたり。出入りの植木屋さんが作ってくれた犬小屋を庭に置いていたが、ちんまり閉じこもるような小物ではない。ウチに入れてくれと

ワンワンキャンキャン吠えて、道を隔てた隣のじいさんが、二階のベランダから大声で「うるさい！だまらせろ！」挙句の果ては「笠原のバカ!!!」と怒鳴り散らすし、しまいには「良識を以って飼われたい」などと赤ペンで書いたメモを郵便受けに入れるものだから、折角の犬小屋は別荘にして室内で飼うことにしたのである。その爺さんは前から親しくもしていなかったが、それ以来、道で会っても挨拶もしなくなった。いやはや、隣のじいさんとはコタのお陰で戦争状態になったというわけである。

コタがある時、台所に入って来て、棚の上に乗せてあった皿から魚の切り身をくわえて食べ始めた。それを見つけた私はコタを押さえつけ、「こら駄目だ、このヤロこのヤロ」と取り

返そうとする。コタは懸命になって呑み込もうとする。私はコタの牙があたって名誉の負傷をする。それでも何とか残りの切り身を奪い返して壮絶な人犬戦争は終わった。コタにして見れば、一切れまるまるせしめたと思ったのに、横取りする奴が現れたわけで不愉快千万であったろう。

しかしコタはこれを根に持つようなケチな奴ではない。ある時、家から脱走したことがあった。夢中になってあちこち探す内に、当時ローラースケート場と言っていた広場の先の水飲み場にいるのを見つけた。私が大声で「コタ!!」と呼ぶと、シッポを千切れんばかりに振りながら私の両手の中に転がり込んできた。まことに「うい奴、うい奴」である。

コタは遊び好きだった。靴下を見つけるとそれを咥えて振り回す。取り返そうとすると逃げまわり、首を振りまわして取られまいとする。取り返そうとするのを遊びと思っているらしく、靴下を咥えたまま突っ立てこちらを見る。大人になっても遊びたがる可愛い奴だった。



靴下を咥えて振り回すコタ

コタを連れてよく山に行った。末娘が運転する車で行くのだが、行った回数は十回である。奥多摩の棒の

折山や日本百名山の一つの筑波山にも登ったが、コタの登った最高峰は菅平高原の先の根子岳である。時は平成七年秋。菅平牧場の脇のなだらかな道を牛の群を見ながら登って行く。お椀を伏せたようななだらかな山だから、先を見ても頂上がどこかわからない。



早く散歩に行こうよ

牧場の端あたり、傾斜が緩くなったところで立ち止まって登って来た道を振り返る。遥か下に日本ダボスと呼ばれているラグビー場が小さく見えるが、そこから次第次第にせり上ってここ根子岳の中腹に達している。目路はるか、遮るもののない広大な風景に私たちが見とれている間も、コタは草叢の探索に余念がない。澄み切った秋空の下、遥か先には白い雪を戴いた北アルプスの山並が延々と続いている。もしもコタが一瞬でも、この広大な景色を目にしたならば、生涯の中で望み見た最も広やかで大きな風景であったろう。

ペンションを出てから二時間半、私たちは標高 2,123 メートルの根子岳山頂に到達した。他には誰もいない静かな山頂で、お湯を沸かして昼食のひとつを過ごした。コタも娘がかついで来た水をたっぷり飲み、好物のビスケットを貰って満足気であった。

その二年後の平成九年十月二十二日の朝、コタこと小太郎は私と妻と末娘の見守る中で天国へと旅立った。涙の別れであった。十三年の短い命であった。しかし、私達の家に来た時から私達の心を捉え、なくてはならぬ家族の一員になった。ひとり留守番させて我々が遅く

帰った時でも、皆の顔を見るなり全身で喜びを表した。

私は、小太郎が、自分が犠牲になってでも家族皆に、限りない喜びと楽しみと、優しさをもたらしてくれた犬の姿をした神様としか思えないのである。

(二代) クロベ 正式名 黒部五郎義常



庭に穴を掘って得意顔

黒部五郎義常とは何と物々しい名前とは思われないか。血統書付きの由緒正しき家柄、いや犬柄のご大層なお犬様である——と言いたところだが、実は我がクロベは、正真正銘の身元不明の庶民犬である。

我が家の一員となったいきさつから話そう。ある日、コタが世話になっていた獣医さんから、拾われた犬がいるから見に来ませんかと言う電話があった。平成十一年三月十四日のことである。私と妻と末娘の三人でその獣医さんの病院に行った。扉をあけると部屋の向こうに六、七匹の犬が固まっている。ちょっと大きい

のが一匹、他は皆子犬である。部屋の中に進むと、その中の一匹がいきなり走り寄ってきた。先生に聞いて見ると、どこそこのゴルフ場の土管の中に捨てられていたと言う。可哀そうに思ったゴルファーが拾ってきて、まとめて獣医さんの所に持ってきたと言う。

全く無責任な奴め、無慈悲な奴め。私達は憤慨しながら、即座にその内の一匹をもらうことにした。それが駆け寄ってきた子犬である。我が家には一年半前に旅立ったコタの強い思い出があった。それなのに——いや、思い出があったが故にコタを継ぐ犬を欲しいと思った。

我が家の一員となった子犬は、背中から頭にかけてが黒くてシェパードに似ているとも思ったが、顔は全くの庶民犬だ。名は黒に因んでクロベエとしたが、これは我が思い出の北アルプス黒部五郎岳にも引っ掛け、また翌日泊まりがけで来た長野の次女の意見も汲んで、勇ましく黒部五郎義常を正式名とした。義経だと悲劇の武将になるので義常にしたのである。ただ、この名で呼びかけることはない。この忙しい世の中、そんな悠長な声掛けはできない。ただ、クロベ !! だけである。可哀そうだがクロベ、勘弁してくれ。

こうしてクロベは我が家の一員になったのだが、実は私は暫く散歩に連れて行ってない。娘と妻まかせだった。と言うのは、クロベが来る三か月前に失神転倒して頭を打ち、慢性硬膜下血腫で手術をしていた。その後も度々失神を繰り返してクロベの散歩どころではなかった。翌十一年七月には首の骨まで折ってしまった。失神は合計三十回もあったが、平成十八年十一月でめでたく終了した。そして漸くクロベの散歩もするようになった。それまでは妻と娘の「仕事」であった。

クロベを散歩に連れて行くまで六年半もかかった。犬とは散歩を通じてより親しくなれる。ようやくの思いであった。初めの内は妻がリードを持ち、私が脇を歩いた。思い返すと、

クロベについての強い印象がないのである。クロベは優しい性格だった。手術はしているが、コタと同じ牡犬だから、もう少し自己主張してもいいと思ったものだった。



孫とクロベは大の仲良し

ただ一度、クロベが勇猛振りを発揮したことがあった。平成二十二年三月末、この日は妻がリードを握り、私が脇を歩いた。散歩の帰り、家の近くまで来た時、自転車に乗った男が片手に犬を引いた綱を握り、片手運転で大スピードで角を曲がって突進してきた。驚いたクロベは先方の犬に向かって突進した。その弾みで妻は転倒し腰を強打した。男は大声で口汚くのりしりながら走り去ろうとする。わがクロベはリードを引き摺りながら、先方の無法犬に吠えかかる。しかし男と馬鹿犬はわめき散らしながら遁走してしまった。私は急いでクロベの所に走り寄り、リードを握った。以上クロベ奮戦的一幕だが、無法男と馬鹿犬のお陰で妻は腰の打撲傷にかかったという一幕である。

なお、後日談ながら、自転車での犬の散歩は違法であることがわかったので、荻窪警察署に取り締まるべく要請した。しかし、担当係の態度が悪いので腹を立て所長宛てに改善方要請書を送った。後日担当課長がお詫びに来た。でも違法なる旨のPRは皆無であった。一庶民の微力を思い知ったと言うお粗末の一席なり。

クロベとはよく武蔵丘陵森林公園に行った。また、末娘の車で犬の泊まれる宿を使って旅を楽しんだ。北海道富良野から層雲峡、あづみ野、吾妻溪谷、八千穂高原、菅平高原、上田に真田、榛名湖、鬼押し出し、川中島、碓氷峠等々……。クロベは土の道を歩くのが好きだった。私にとっても楽しい日々だった。

しかし、平成二十三年十月、クロベは右脚に腫瘍ができて手術したが、医師からは悪性のように知らされた。暫く小康状態だったが、翌年十一月にはひきつけを起こし、失禁も始まり、目も見えなくなって盛んに徘徊するようになった。私達も特別食を与えて治癒を祈ったが、皆の祈りも空しく、家族に見守れながら最後の時を迎えた。皆涙を溢れさせながら、心優しかったクロベを見送った。クロベもコタと同じく、神様の国から和の心を持ってきてくれた。最後の日の少し前、殆ど歩こうとしなかったクロベを外に出すと、私と妻を引っ張るように昔歩いた散歩コースをかなり遠く迄歩いてくれた。この世の見納めに連れて行ってくれたとしか思えないのである。



一緒に旅行 上信越橋川

(三代) ユウガ 正式名 優雅

この名前を聞いて犬種を当てる人はいまい。我が家三代目の番犬の秋田犬である。これは我々がつけた名前ではない。命名の主は保護犬としてそれまで面倒を見ていた人である。左様、どこかに捨てられて保護された犬である。だから正確には氏素性も厳格に言えば本当に秋田犬なのかもわからない。

二代犬を飼って以来、末娘は完全に犬ファンになってしまった。クロベをなくしてからも、犬アンテナを張りめぐらし、今度は大型犬を、特に秋田犬をと思っていたらしい。そして、秋田犬を扱う千葉のボランティアから通報があり、平成二十五年九月二十九日、娘は妻と共に、そのボランティアの所に出掛けた。そこでお見合いしたのが今いるユウガである。我が家に来たのは翌十月十九日であった。この家でいいのか、を検分しに来たためでもあろう。



ウチの広縁でくつろぐユウガ

やって来た犬は、顔や体躯は如何にも秋田犬らしい一、二歳くらいの若い牡犬である。ただし小柄である。初めて部屋に入る時は警戒して後ずさりした。ただ吠えもしないし唸りもしない。だんまりだ。手を差し延べても逃げの一手だ。ただ娘には警戒せず素直に従った。双方 OK の合意あり、ユウガはめでたく我が家の一員になった。

名前は当初ウチでつけるつもりだった。大体牡犬にユウガ（優雅）なんてキザでいやだと思った。私は忠犬ハチ公より強い九助にしたいと主張した。他に案もあったが、呼ばれる犬の混乱を考えて、ボランティアの所で呼ばれていたユウガにしようとなったのである。



一緒に旅行 八幡平原

ユウガはじきに馴れた。しかし今まで飼ったコタやクロベが如何にも犬らしい犬なのに、ユウガは全く違う。列举してみよう。① ほとんど吠えない ② じゃれない ③ 甘えない ④ ウチの場合、娘が呼べばやってくるが、私や妻が呼んでも来ない。玄関にのそのそ出てくるのは娘が帰った時だけで他の人の場合は関心なし。—まあ、これでは愛玩犬とはとても言えない。番犬としてはどうであろう。物静かなドロボーがきたとする。ドロボーは静かに入ってきて、寝そべっているユウガのそばで静かに仕事をして、あばよと言いながら静かに出て行く。日頃のユウガを見ているとありそうな話で心配だが、小柄とは言え大きな体を見れば諦めてくれると思うが。



一日中、ほとんどこのスタイル

また、ユウガは辛抱強い。呆れるばかりだ。部屋から出たい時、また入りたい時、一言も発さずにドアの前に立っている。ワンとかキャンとかウーとか、ドアを押すとか引っかくとか、そういう行動は皆無である。しまいには寝そべって人が来るのを待つ。だんまりの忍の一字である。もう少し工夫してもらいたいところだが、この「待つ」という愚直さと言うか辛抱強さが忠犬ハチ公に通じているかも知れない。

ユウガの好物に妻の手製のパウンドケーキがある。食堂のテーブルの上にパウンドケーキを入れたケースがある。ユウガは茶の間に顔を伏せて眠っている。こちらが、ケーキの箱の蓋をそっとあける。ケーキを取り出す——すると寝ていたユウガがのそっと立ち上がってゆっくりとこちらにやって来る。テーブルの上のケーキは見えないし音もたてていないのに。風もないのに匂いが僅かでも行くのだろうか。本能なのか、第六感なのか。

ユウガの一日は娘の散歩で始まる。(妻も私も足腰が悪いので大きな犬の散歩はできない) 帰ると、食堂の敷物を猛烈な勢いで引っ掻く。(理由は不明) 次は朝食だ。これをあつという間に平らげると隣の茶の間か縁側に出て、頭を床にくっつけて眼をつぶる。物臭太郎そのまま。その間、娘が出勤する時だけ玄関に出て見送る。そしてまたのそのそと部屋に戻ってつぶれて眠る。“人と遊ぶとか、じゃれると言うような幼稚なことは頼まれてもやらん。この家の人間どもを観察してエッセイでも書こう”と想を練っているに違いない。

ユウガと言う犬は、いや秋田犬と言う犬は犬と言うより人間——いやそれはまずい——昔から言う物臭太郎の生まれ変わりではないか——そんな気がするのである。何となく可愛い奴、それが秋田犬なのであろう。